

雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

五感と美意識(3 嗅覚の巻)

文芸や比喻や心情でいう嗅感ではなく、鼻腔で覚える感覚について思う。鼻は離れた場所にある物の匂いを嗅ぐことができる。物から発する微粒子や揮発物が空中を浮遊し、鼻腔に届いたことを鼻が匂いとして感知する。水中では匂いの成分が水に溶けて移動し、水中生物が感知する。

匂いに関しては発する側と受ける(嗅ぐ)側がある。生物は、生きていても死体となっても、発する匂いは他の生物を勧誘し、自己の存在を知らせ、その注意をひく等、あるいは他の生物を追いやり、威嚇し、身を守る等の効果を持つ。匂いはいかなる意味を持つ一種の信号といえよう。

匂いとして身近なものは、食べ物の匂いであろう。鼻は口に近いため、嗅覚と味覚が一緒になることがあるが、嗅覚と味覚は基本的に違う。味覚の場合は物が舌に触れなければ感じることはできないが、嗅覚は物が離れていても匂いを感知することができる。

匂いには強弱がある。人間の鼻はさほど敏感ではないから、匂いの源が遠いと匂いが薄まり、感じられなくなる。ただし密閉できる容器に匂いを詰めて運べば、どんな遠方の匂いでも嗅ぐことができる。「風味」という言葉がある。風の味とは絶妙、匂いを含んだ空気を鼻で味わうもので、食べ物に関して言うが、嗅覚というより鼻による味覚と言えよう。

嗅感には多様だが、呼称は現実的な言葉が多い。茶の香り、バラの香り、生臭い、すえ臭い、腐った匂い、焦げ臭い、ガス臭い、など○臭い、○の匂い、○の香りと表現される。これらの混合や書き表せない匂いもある。魅力的な匂いは「香り」というと上品に聞こえる。悪臭は「臭い」と表現される。香りは美であり、悪臭は醜、人々は美しい匂いを求め、醜い匂いを避ける。

嗅感の好みは心理的なもので、同じ人、同じ匂いであっても場面により良い香りになったり悪臭になったりする。人によっても匂いの善し悪しは異なる。即ち匂いの好き嫌いは、匂いの化学的成分に関わらず、人の嗅覚で決まる。しかし一般に香料といわれるものは、多数の人に良い香りとされるから、匂いの美醜の判断にはある種の傾向があるといえる。

嗅ぎ分けの能力には個人差がある。勝れた嗅覚の鼻と鈍感な鼻では損得が分かれる。鈍感な鼻では素晴らしい香りを満喫できないが、悪臭や鼻への嫌な刺激をさほど気にしなくてよい。勝れた嗅覚の持ち主は悪臭も受け入れなければならない。どちらが良いか。嗅覚器官の本来は匂いを正しく認識し嗅ぎ分けられることにあるから、嗅覚は勝れているに越したことはない。嗅覚が鈍く、ガス漏れなど危険な状態の匂いを感知できないでは困る。匂いの好き嫌いに係わらず、微妙な匂いの嗅ぎ分けができてこそ健康な嗅覚といえる。しかし匂いの種類は無数にあって、健康な嗅覚の人でも慣れない匂いの正体を言い当てることは容易でない。この点に関しては嗅ぎ分けの専門家として、臭気判定士という公的な資格がある。

嗅覚は他の生物にもある。人間の嗅覚は他の生物に比べると、必ずしも勝れてはいない。犬やある種の昆虫は人間より遥かに勝れた嗅覚を持っている。犬の場合は犯罪捜査などに活かされている。

匂いは商品になる。香水の類は多数ある。香水は液体だが揮発して空気に混ざり、悪臭を消し、良い香りを嗅がせる「気体の化粧品」と言える。その他特別の匂いを発し、害虫を寄せ付けぬ薬剤もある。ガス漏れ感知器も嗅覚に関する商品と言える。匂い一般を感知、測定する機器もある。

うなぎ屋の前に漂うタレの匂いは魅力的なもので、少し回り道だがそこを歩いて匂いを嗅いだ昔のことを思い出す。タレの美しい匂いに魅かれて店に入るほど裕福ではなく、タレの誘惑には打ち勝った。しかし、ただで嗅ぐ美しい匂いの先にある本命の美味を味わうことなく、空しい気分になった。

.....